実践発表

小

それ、いいね

～その子らしさを発揮して、共に学び合う図工の時間をめざして～

4年生　生駒市立生駒北小中学校　大谷　智子

1．はじめに

本来「自由で多様な世界に生きている」かつ「共感的感性に生きる存在である」（水島尚喜）児童がそのままに、自分のよさが認められ自己肯定感を高めたり、目的を達成しようと主体的になったりする力を育てるために、本実践ではテーマを「それ、いいね」とした。「それ、いいね」とは、自分の表現のよさを味わう姿や、互いの表現のよさを認め合う姿を表している。本実践では①環境設定の工夫　②意見や鑑賞の交流　③伴走する教師の姿勢という３つの軸を設け、その子らしく働かせている一人一人の感性や考えを大事にし、同時に自由な鑑賞交流を繰り返すことで、児童同士が高め合う学習を目指した。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を成すものとして児童の成長に寄り添う方法となるか探っていく。

2．実践の概要

【題材名】

「まぼろしの花」

Ａ表現(1)イ(2)イ　Ｂ鑑賞(1)ア

〔共通事項〕(1)アイ

【目標】

「まぼろしの花」を想像し、絵の具の色の組合せや、筆の動かし方、道具・材料の使用など表し方を自ら選択し、また手や体全体を十分に働かせて工夫を重ね、自分だけの「まぼろしの花」を描く学習活動に進んで取り組む。

3．活動の内容・方法

第１次　（７時間）

いつ、どこで、どんな時に咲く、自分だけのどんな「まぼろしの花」を描くか考え交流する。前時「めざせもようマスター！」（モダンテクニックの探求）を振り返り、表現方法について考える。

自分の想像する「まぼろしの花」にふさわしい基底材・材料・表現方法を選び、自分の「まぼろしの花」らしさが表現できるように、描き方を工夫しながら描く。自由な中間鑑賞の中で「それいいね！」と互いを認め合いながら、自分の思いに沿った表現を目指して試行錯誤を重ねる。

第２次　（１時間）

完成した友人の作品をあらためて鑑賞し、「まぼろしの花」らしいところ、素敵なところを伝える。

4．成果と課題

児童は、「ぼくのは、氷の山に咲く花」「私のは、手のひらから咲く花」と自分の想像と向き合う中で、前時の表現方法を振り返ったり、「それいいね」「私もやってみよ」「どうしたらいいかな？」と友人の作品や行為を見たり教え合ったりして、自らの作品をよりよいものにしようと試行錯誤を重ねていた。長時間にわたる課題であったが、より工夫した表現を目指して時間の限り意欲的に取り組んでいた。また、完成した作品に満足感を示すとともに、友人からの評価に喜びを感じる様子が見られたことから、成果はあったと考える。一人の児童の伴走の仕方、手放すタイミングに課題を残した。児童の様子を継続的に観察し、児童が自分らしく、共に学び合えるようにこれからも支援していきたい。

実践発表

小

雨の日、感じたよ

～五感を通して表したいものを見付けるための授業づくり～

３年生　橿原市立鴨公小学校　金石　考弘

1．はじめに

この題材では、身近にありながらときには煩わしく感じる「雨」に対する見方・考え方を広げ、感じたことを「雨の日、感じたよ」として絵に表していく。単なる写実的な描写に留まらず、雨から感じたこと、想像したこと、見たことといった多様な側面から、児童一人一人が「表したいこと」を見付け出し、それを絵に表現することを重視している。そのために、雨を多角的に表現している絵本「雨、あめ/ピーター・スピアー」を導入に読み聞かせたり、実際に雨の中に出かけたりする。児童が五感を通して表したいものを見付けられるようにすることで、「雨」から着想を得て紡ぎ出し、個性豊かな「雨の日に感じた」ことを大切にし、自分だけの絵に表すことを目指していく。

2．実践の概要

【題材名】

「雨の日、感じたよ」

Ａ表現(1)イ(2)イ　Ｂ鑑賞(1)ア

〔共通事項〕(1)アイ

【目標】

・雨から発想して絵に表すときの自分の感覚や行為を通して、形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じなどが分かるとともに、水彩絵の具やクレヨン・パス、ペンなどについてのこれまでの経験を生かし、表したい雨や雨が降る感じに合わせて表し方を工夫して表す。

・「雨」について形の感じ、色の感じ、それらの組合せによる感じなどを基に、自分のイメーをもちながら、造形的な面白さや楽しさ、表したいこと、表し方のよさなどについて感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を広げる。

・絵の具を筆で塗る心地よさを味わったり、ペンやパスと組み合わせたり、雨の日について思いを巡らせたりして、表したい雨の日の物語を絵に表す学習活動に楽しく取り組む。

3．活動の内容・方法

【導入】

・「雨、あめ/ピーター・スピアー」の絵本を読み、今後の活動の見通しと意欲をもつ。

・雨が降った日に、外へ出かけて、新しい楽しみを探す。雨を眺めてみたり、雨の中に行ったり、水たまりを作ったり、水の流れを作ったりして、様々な雨を楽しむ。

【展開～振り返り】

・雨の日に感じたことを絵に表す。

・これまでに使ってきた道具や材料を使って工夫して表す。

・雨の日に感じたことを表した絵をお互いに鑑賞し合う。

4．成果と課題

導入として絵本の読み聞かせを行ったことで、児童は雨に対する多様なイメージを全体で共有することができた。この活動は、その後の「雨の中、外へ出かける」という実体験への意欲付けとなり、児童の積極的な参加を促す上で効果的であった。実際に雨の日に屋外に出た体験は、児童一人一人が「雨の中で何に心を動かされたか」、「何を表現したいか」を見付ける上で非常に有効であった。実体験を通じ、画一的なイメージにとらわれず、個々の感性に基づいた表現のヒントを得ることができた点は、本活動の大きな成果といえる。

一方、雨の日に屋外へ出ることができなかった児童は、「水たまりを長靴で踏む」といった、一般的に想像される画一的な表現にとどまる傾向が見られた。このことから、五感を通して表現したいことを見付けるための実体験が、児童の表現を豊かにするために不可欠であることが改めて明らかになった。

今後の課題としては、活動に入る前に、児童とより深く話し合う機会を設けることが挙げられる。具体的にどのような表現が可能か、何に注目すると面白い絵になるかといった「工夫の視点」を事前に共有することで、児童がテーマをより深く探求し、表現の幅を広げられた可能性がある。